

## シェリングとハイデガーの「自由」

五十嵐 沙千子

ハイデガーは何度もシェリングについての講義を行っている。その中心テーマは「自由」である。

この論文では、まずは——ハイデガーとは別に——シェリングの自由を見る。それからハイデガーのシェリング論を見ていく。ハイデガーの読みの中に、ハイデガーが「シェリングから」引き継がなければならなかったものがあるだろうからである。ハイデガーにはシェリングが必要だったのだ。

ハイデガーが聴き「取った」シェリング、ハイデガーのシェリングとは何か。

### 1. シェリングの自由<sup>1</sup>

シェリングにとって存在するのは全体としての神であり、そしてその神のもとにある存在者である。もちろんこの神は例えばキリスト教など特定の神に限定されない「神」である。いかなる限定も持たずあらゆるものを包摂し支配するものとして神はある。「神があらゆるものをそのもとに置く」のではなく、「あらゆるものがそのもとに置かれるもの」を「神」としてシェリングは設定するのである。ごく単純に言えば、シェリングにおいて神は全体集合である。

とはいえ個々の存在者の集合体が神なのではない。「あらゆるものがそのもとに置かれるもの」として設定されるこの神が全体集合であるとすれば、それは単に「あらゆる」「あるもの」である存在者の集合にとどまらず、存在者の補集合としての非存在をも包摂する全体集合でなければならない。つまり神は、未だ存在していない存在者／すでに存在していない存在者をも包摂するのである。こうして神の下で個々の存在者は「現にあるそのもの」である固定から運動へ、すでに存在していない存在者からまだ存在していない存在者への生成を、自らの存在として与えられることとなる。人間は神のもとで初めて／神のもとでのみ、自らの有限性／限定性を、無限定性／無制約性に開かれるのである。その場所／力能こそを神とシェリングは呼ぶのだ。

シェリングは言う。

唯一の存在者のなかにある絶対的な原因性は、他のすべての存在者に対して、ただ無制約の受動性だけを残すのである。それだけでなく、すべての世界存在者は、神に依存しており、その存続さえ、たえず更新される創造であるにすぎない。この創造において、有限な存在者は、やはり限定をもたない一般者としてではなく、具体的に限定された、個別的な存在者として生みだされる。つまり、他のいかなる思想や努力、行為

ではなく、まさにこの思想や努力、行為を具えた存在者として生みだされる。(WF403)

原因となることができるのはただ神だけであって、神以外の他の存在者はすべて神によって／神を原因として存在する受動的存在に他ならない。生むものはただ神のみであってそれ以外のすべてのものは生み出されたもの、創造されたものである。存在者は神の被造物であるというこの絶対的受動性において存在する。そして創造する神のみが無限であるとするれば／無限性を神と呼ぶのだとするれば、神ならぬ存在者＝世界存在者のすべては有限なもの、限定されたもの、すなわち具体的個物である。存在者は神によって具体的個物として設定され、それぞれの場所に置かれ、それぞれの有限性を「生きている」のである。そう設定したのは神である。だとすれば、存在者が有限であり個別存在者であるのは彼が有限かつ限定的な個別存在者として神によって設定されなければならなかったからである。

なぜか。

それは人間が自らの有限性／個別性を生きるため、言葉を換えていえば自らの有限性／個別性を苦しむためである。先述した通り人間は人間一般としてではなくまさに個別かつ有限なこの私＝自己として置かれている。個別の有限な自己として置かれているからこそ、自他の区別も、他者との差別・闘争・対立も、如何にしても解消できない自己自身の有限性の自覚も生じる。あくまで自己の拡張ないし維持にしがみつこうとする苦しみも生じる。これが、神が人間に与えた「被造物の我意 (Eigenwille)」(WF436) である。まさに人間は個別有限な自己であるがゆえに、自己がこの個別有限な自己であることに、すなわち自己性 (Selbstheit) = 我性に苦しむのだ。「人間は、永遠の昔から、自己を我執性と我欲のうちに捉えた。そのために、生まれてくるすべての人間は、悪の暗い原理がまとわりつくように生まれてくるのである」(WF471-472)。人間のなす全ての悪はこの我執性から生じてくる。悪を生むこの我執性の暗い原理の支配する根底に人間はある。生まれてくるすべての人間は有限かつ個別の自己として「悪の暗い原理がまとわりつく」ように神によって設定されているのである。

だとすれば人間が悪をなすのは神のせいなのか？

まさにそうだと言わざるを得ない。人間は神の被造物であり、神の設定のうちに、すなわち神に対する絶対的受動性の中にあるからである。神が人間を創ったのだとすれば、人間のこの我性の枷も悪の根底もまさに神が人間に与えたもの、設定したものである。だがそれが神の設定だとすれば、人間が我性を持ち悪をなすのは神の創造の不完全さの故ではない。神はその神である力の通り完全に人間を創ったのである。したがって人間が悪の根底にあるのは神の創造が不完全だからではなくむしろ完全だからであり、神が創造した人間が不完全なものだからではなく、むしろ——神の創造物が常にそうであるように——完全なものだからでなければならぬ。だからシェリングはこう言うのだ、「というのも、悪をなすのは、ただ人間だけである、つまり、目に見えるあらゆる被造物のなかでもっとも完全なものである人間だけであるということをちょっと考えただけでもすでに、悪の根拠が欠乏とか剥奪とかいったもののなかには決して存在しえないことが示されているからである。……したがって、悪の根底 (根拠) は、ただ単に積極的なもの一般のうちにあるのではなく、自然が含む最高度に積極的なもののうちに存在しなければならない」

(WF444-445)、と。

ではこの根底の「最高度に積極的なもの」とは何か。なぜ神は人間を悪の根底に置いたのか。

その答もまた根底に置かれたこの人間の苦しみから導出される。人間を根底に置くことによって実際に帰結するのは、人間がこの我性の根底を徹底的に苦しむということである。先述の通り、我性に囚われている限り人間は苦しみ続けなければならない／決して幸せになることはできない。これが、神が設定した人間の条件である。その設定の通りに人間は我性に苦しみ続けるのである。そして彼は必然的にその苦しみから逃れようとするのだ。苦しいからである。苦しくなければ一体誰が置かれた場所から動くだろう？ 苦しいからこそ人間は必然的に自らの我性の枷から救われようと動くのである。これこそ神が人間をこの根底に置いた積極的意味である。すなわち根底の苦しみが持つ最高度に積極的なものとはまさにこの運動、根底から超越へのこの生成の強力な促しに他ならない。根底とはこの促しの力、人間の生成を可能にする働きである。そしてこの苦しみによる促しにおいて、自己の拡張と維持を求める我執性・自分だけの利益を求める特殊の意志、まさに自己の苦しみを生むものを人間自身が初めて放棄しようと欲し、我性を捨てようとする意志、我性を捨てて自他を一にしようとする普遍的意志、すなわち愛の意志が生じてくるのである。この意志は生じざるを得ない。なぜなら我執性を投げ捨てること＝自他の区別を撤廃して自他を共に愛することなしには、人は我執性の苦しみから抜け出すことができないからである。まさに人間は我性の苦しみから脱出しようとして我性を捨てようとし、愛の意志を持つのである。それは彼が愛することができるところからではない。彼は依然として我執性に囚われ、他を愛することができない。それにも関わらず彼は愛を意志するのである。愛の意志は人間において救われようとする意志なのだ。

だからこそシェリングは次のように言う。

しかし、根底は個々の人間のなかでも、たえまなく働きつづけており、そのなかに我執性と特殊の意志とを呼び起こす。それはまさに、この特殊の意志に対抗して、愛の意志が立ち現れうるためにである。神の意志は、あらゆるものを普遍化し、光との統一へともたらすことに、あるいはその統一のなかに保つことにある。それに対して、根底の意志は、あらゆるものを個別化することに、あるいは被造物化することにある。根底の意志は不等性のみを欲するが、それは、同等性がそれ自身に、そして根底の意志自身に感知されるようになるためである。(WF462)

「たえまなく」というのは、常にということ、途切れることがないということである。一瞬も途切れることがなく人間はこの根底にあって我執性に動かされている。いかに成長し変化しようとも人間は生きている限り絶えず自他を区別し、他人と比較し、自分がより多くを得ようと欲し、そう欲するこの根底にあって常に苦しみ続けるのだらう。そして絶えることのないその苦しみにあって「たえまなく」、根底は、人間に我執性の放棄、自己性の放棄を促し続ける。死ぬまで自己である人間は死ぬまで我執性の軛の下にあり、そして死ぬまで、この我執性を超越し、愛の意志への生成を続けるよう促し続けられるのである。すなわち根底は生成＝超越の先行条件である。

シェリングは言う。「この関係は、自然における重力と光との関係によって類比的に解明することができる。重力は光の永遠に暗い根底として光に先行する。この根底自身は顕勢的（actu）ではなく、光（実存するもの）が現れるとともに、夜のうちに逃れ去る」（WF429-430）、と。「この先行する暗闇なしには被造物の実在性は存在しない。闇は被造物が必然的に相続した遺産なのである」（WF432）。「われわれは、全力を尽くして光へと向かうように人間を駆り立てるものとして、深い夜の意識、つまり、人間がそこから高められ、現存在するに至った源である深い夜の意識以上のものを知らない」（WF433）のである。

こうして根底は遺産でありギフトである。それは神のギフトである。「神の意志は、あらゆるものを普遍化し、光との統一へともたらすことに、あるいはその統一のなかに保つことにある」からである。それを実現するのが根底という仕掛け、人間を闇から光へ、我執から愛へと動き生成するエネルギーあるいは仕掛けである。だとすればわれわれ人間が完全に我性の闇にあること、世界に悪が生じることこそ神のギフトに他ならない。

シェリングは言う。

根底の意志の方について言えば、それもちろん愛を破壊することができないし、破壊を要求もしない——しばしばそう見えるにも拘わらず——。というのも、根底の意志は、愛から背を向け、それ固有の、特別な意志でなければならないからである。なぜそうかと言えば、それはまさに愛がその全能において現れるためにである。愛は、ちょうど光が闇を通して現われ得るように、この固有の意志である根底の意志を通してこそ、現われ得るのである。根底は、ただ啓示への意志であるにすぎない。しかし、まさに啓示が存在するようになるために、根底は、我執性と対立者と呼び起こさなければならないのである。つまり、愛の意志と根底の意志とは、まさに両者が分かたれ、それぞれが最初から独立して働くということを通して一になるのである。（WF454）

人間はどこまでも神のもとにある。その絶対的受動性のうちにあつて人間は闇に置かれ、闇の寒さに苦しんで自ら光へと動かされていく。この苦しみのなかで、我執性＝自己性を捨てなければ自己が救われることはないという啓示を人間に開くのは彼に苦しみを与える神である。苦しみを「たえまなく」与え続けるというかたちで神は人間にギフトを与え続けていく。こうして人間は我性の死、すなわち自他の統一＝愛の意志へと突き動かされていくのである。そしてこれをシェリングは「誕生」と呼ぶのだ。

すべての誕生は暗闇から光への誕生である。種子は地のなかに埋められ、闇のなかで死ななければならない。そうすることによってより美しい、光輝く姿が現れて、陽光の下で花開くのである。（WF433）

人間は神によって根底に置かれ、その中で生成へと促されて愛の意志へと「誕生する」。だとすれば人間の誕生は二度あるということなのだろうか？ 一度目はこの世界への生まれ落ちとして、そして二度目は我執性の特殊意志から愛の普遍性の中への誕生として。だがそうではない。誕生は二度ではない。この誕生は光へのたえまない誕生でなければ

ならない。シェリングは次のように言うのだ。「人間のうちには闇の原理の全威力が存在する。そしてまさにその人間のうちに同時に光の全威力が存在する。……人間の意志は、まだやっと根底のうちにあるにすぎない神の萌芽、永遠の憧憬のうちにある萌芽である」(WF437 傍点引用者、以下同じ)、と。

人間のうちには闇の原理の全威力が存在し、同時に、その人間のうちに光の全威力が存在する。人間は常に闇の暗い根底にある。しかし、それは「まだやっと根底のうちにあるにすぎない神」の萌芽であるとシェリングは言うのだ。我執性に縛られている人間の根底の意志は、単に「人間の」意志なのではなく「まだやっと根底のうちにあるにすぎない」神の萌芽なのだと言うのだ。

根底にあって闇の原理に完全に縛られているように見える人間の苦しみが深ければ深いほど、その闇から解放され、我執性を放棄した光へと生成しようと突き動かされる光の意志、光への憧憬が一層強い力たちで働くのである。この意志、闇に置かれた人間の光への強い憧憬こそ、その憧憬において神の憧憬を実現するのだ。光への憧憬を持つその人間の憧憬において、光への神の憧憬が実現しているのである。光への憧憬に突き動かされるその人間の憧憬こそ神の憧憬の現れなのである。人間は自らの苦しみの救いとして光を憧憬する。これに対し神は「永遠の憧憬のうちにある」。「人間の意志は、まだやっと根底のうちにあるにすぎない神の萌芽、永遠の憧憬のうちにある萌芽である」。シェリングはこう言う、「それは永遠の一者が自己自身を産もうとして感じる憧憬である」(WF431)、と。だとすれば萌芽である神は生い育つために、運動し生成する人間という契機を必要とするのか。むしろ神は自らが生い育ち運動と生成の中にあるために、あるいは神は憧憬であるために闇から光への憧憬の旅程をたどる人間というものを創造したのか。

完全なる神はそれが完全であるということによってただ一つのことから排除されている。それは神には生成が欠如しているということである。完全な者は既に完全なのであり、不完全なものが完全へと運動する生成と成長を持たないのである。

だからこそシェリングはこう言うのだ。

すべてのものがそこから生まれてくる円環のうちでは、一者がそれによって生みだされるものが、それ自身再び、一者によって産出されるということは、少しも矛盾ではないのである。ここでは最初のものも最後のものもない。すべてが互いに相手を前提しあっているからである。どれも他ではないが、しかし他なしには存在しない。(WF430)

生成する人間が無ければ一者である神はその生成の場を持たないだろう。なぜなら神は完全だからである。だが完全なものは他に憧憬することはない。神は人間を我執性の悪の根底に置き、彼にそれを苦しまざるを得なくさせ、必然的に彼がその根底から光へと歩み出さざるを得なくさせ、闇から光への、人間から神への行程を無限に循環させる。そしてその人間の循環において、一者である神は無限に神自身をその生成の循環のうちに置くのである。なぜか。

「神は、死せるものの神ではなく、生けるものの神であるからである」(WF413-414)。



そうシェリングは言う。

神は死せる神ではない。神は生きているものの神、すなわち生ける神である。

最初にまず内在の概念が——それによってたとえば、諸事物が神のうちに死んだような仕方では包摂されているということが表現されようとするかぎり——すっかり排除されなければならない。われわれはむしろ、生成の概念が、諸事物の本性にふさわしいただ一つの概念であることを認める。しかし諸事物は絶対的に見られた神のうちに生成することはできない。なぜなら諸事物は全面的に、より正確に言えば、無限に神から異なっているからである。神から区別されてあるために、諸事物は、神とは異なった根底において生成しなければならない。しかしまた神以外には何も存在しないのであるから、この矛盾は次のような仕方では解決することはできない。すなわち、諸事物はその根底を、神自身のうちの神自身でないもののうちにもつ。(WF431、傍点原文、以下同じ)

人間は神の「死んだ」包摂物ではない。死んだ個物の集合が神なのではない。死んだ個物を神は必要としていない。もしそれらが必要だったのなら神はそれを創造しただろう。

だが神が創造したのは根底にあって苦しみ、その苦しみから逃れようとして自らの前提＝我性を超越しようと動く人間だった。

神が人間を創造したのは、神にとって人間を創造することが必要だったからである。神は運動し生成する人間という存在を自らのために必要としたのである。

なぜなら神は愛だからである。つまり神は愛＝統一である。統一とは統一することである。愛とは統一の意志である。だが統一が実現するためには分裂が先行しなければならないのである。分裂なしには統一することは不可能である。愛の統一が、すなわち神が実現するためには、我性という分裂が、すなわち人間が根底にあって自他を区別し分裂することが必要である。神は愛の意志＝統一という光への永遠の憧憬としてある。神は分裂を統一しようとする愛の意志として、闇において「たえまなく」光を実現し続けるのである。光はそれがあるためには闇においてたえまなく実現し続けなければならないではないか。

したがって「すべてのものがそこから生まれてくる円環のうちでは、一者がそれによって生み出されるものが、それ自身再び、一者によって産出されるということは、少しも矛盾ではないのである。ここでは最初のものも最後のものもない。すべてが互いに相手を前提しあっているからである。どれも他ではないが、しかし他なしには存在しない」ということになる。

だからこそ諸事物はその根底を、神自身のうちの神自身でないもののうちにもつのである。分裂は神自身ではない。なぜなら神は統一だからである。だがこの根底における分裂なしには、神は実現できないのである。

こうしてあらゆるものは神のために存在する。あらゆるものは神として／神のうちに存在する／神以外には何も存在しない。そしてこのあらゆるものの分裂と生成において神は自己啓示 (Selbstoffenbarung) する。だが、人間がいなければ神は存在できないのである。

神における内在と自由とは、決して矛盾しない。まさに自由なもののみが、そしてそ

れが自由であるかぎり、神のうちにある。それに対して自由でないものは、そしてそれが自由でないかぎり、必然的に神の外にある。(WF415)

シェリングの「自由」は明快である。シェリングのいう「自由」とは「解放」のこと、つまり人間を拘束するものからの解放が彼のいう「自由」である。では人間を拘束するものとは何か。人間のエゴである。人間は自分自身のエゴ＝我意によって縛られている。社会や自然といった必然的・外的な条件が人間を拘束するのではなく、自分の我意が自分自身を縛るのである。

以上が、シェリングの自由論についての論者の解釈である。

では、ハイデガーのシェリング解釈はいかなるものなのか。以下、もっともまとまった形でハイデガーがシェリングについて論じている『シェリング講義』(Schellings *Abhandlung über das Wesen der menschlichen Freiheit*)を中心に彼の解釈を見ていく。

## 2. ハイデガーのシェリング

ハイデガーはシェリングの自由論について端的にこう言う。シェリングにとって「自由は人間の特性ではなく、むしろ人間が自由の所有物」(SA15)なのだ、と。われわれはまずここから始めよう。

この論文(論者注：シェリング『人間的自由の本質』)では、自由が人間の特性とみなされているのではなく、むしろ反対に、せいぜいのところ人間が自由の所有物とみなされているにすぎない……自由はすべてを包みこみ、すべてを貫通する本質であり、そこに置きもどされてはじめて人間が人間になるといったもののなのです。ということは、人間の本質は自由<sup>に</sup>根ざしているということです。一方、自由そのものは、真の存在一般のもつ一つの規定、いっさいの人間的存在を凌駕する規定なのです。人間は人間として存在<sup>し</sup>て<sup>い</sup>る<sup>か</sup>ぎり、存在のこの規定に関与しなければなら<sup>な</sup>いし、人間は、自由へのこの関与を果たすかぎり<sup>で</sup>存在するのです。(SA15)

せいぜいのところ人間とは自由の所有物にすぎない、とハイデガーは言う。「人間が自由をもつ」のではない。「自由が人間をもつ」のである。もちろんそれは通常<sup>の</sup>考えとは「反対」である。通常われわれは「人間の」自由という言い方をする。背景にあるのは、「人間が」自分の自由をもちその自由を行使する、という考えである。実際われわれには社会生活を営む上で一定の自由が「認められたり」「与えられたり」している。このように「認められ」「与えられた」自由をわれわれが所有し行使する、というのが通常の自由の解釈である。

これをシェリングは逆転する。人間が自由を所有するのではなく、自由が人間を所有する、というのだ。言い換えれば、人間が自由を行使するのではなく自由が人間を行使するのであり、まず先に人間が存在し・その「人間の」所有物として自由があるのではなく、まず自由が先に存在し・その自由の所有物として人間が置かれているというのである。人

間が自由をもっているのではなく、自由が人間をもっている／人間は自由の所有物であり、「自由が」人間を行使するのだ。主語はつねに「自由が」であり、「自由が」「人間を」もつ、という構造になる。人間を支配するのは自由であり、われわれは自由の持ちものとして存在するのである。

われわれ人間が自由の持ちものであるとすれば／それがわれわれ人間の本質であるとするれば、当然のことながらわれわれは自由の「外」に存在することはできない。自由の「中」に存在するかぎりにおいて／自由に支配されるかぎりにおいて、人間は人間である。だとすれば、人間であるということは自由の中に「いる」ということ、自由に「凌駕される」ということ、自らを自由に「引き渡す」ということ、自らにおいて自由を「引き受ける」ということ、つまり自ら、自由に十全に支配されるということにほかならない。自由に十全に支配されることを自ら「引き受ける」というこの能動的な受動態においてはじめて、人間は人間「である」のだ。人間「である」ことはこの引き受け／引き渡しにおいて生起する。だとすれば人間「である」こと＝人間が「存在する *sein*」ことは持続する状態ではない。その都度その瞬間の存在の選択において人間は「人間」として存在する——「人間」に置き戻されるのである。人間は自由の所有物、自由の奴隷である。存在するのは自由であり、自由が人間という身体において自らを現実化するのだ。「自由はすべてを包みこみ、すべてを貫通する本質」なのである。だが、もし「自由がすべてを包みこみ、すべてを貫通する本質」だとすると、自由は包括者であり、したがって自由は神である。包括する絶対者は神以外に存在しえないからである。

こうしてシェリングの汎神論は完結する。神は万物である。したがって神は人間である。神は自由である。したがって人間は自由である。

シェリングはこの汎神論によって一般的な汎神論批判を克服し、同時に全く新しい自由論を提示することになった、とハイデガーは言う。

周知のように汎神論に対する批判とは、汎神論は宿命論に帰結せざるを得ず、汎神論を採るかぎり存在者の自由も主体性も不可能となる、というものである。万物が自らに先立って神に決定されているとすれば万物は完全に受動的な客体にされてしまう。世界は神が敷いたレールの上を無限走行する事物たちによって構成されていて、レールを外れる自由はもとより個々の意志も存在しえない。もし人間が神の完全な奴隷であるとするれば奴隷である限り人間の自由はない、ということになるだろうか。もしこの汎神論批判が正しいとすれば、汎神論によって人間の自由を論じようとするシェリングの目論みは茶番である。

だがこの批判をシェリングは、人間が神の奴隷だからこそ、神の奴隷として完全な自由を命じられ宿命づけられているという仕方で、すなわち宿命論によって自由論を根拠づけるという仕方で切り返すのである。切り返しによってシェリングが確保するのは人間の完全な自由である。むしろシェリングはこの不可能な＝完全な自由を確保するためにこそ汎神論を置くのだ。ハイデガーは次のように言う、「シェリングの主張の内容は、要約すれば、さしあたり次のようになります。つまり、自由のもっとも根源的な「きわめて切実な」感情こそが、まさしく汎神論を要求する、というものです」(SA119)。さらにハイデガーはこうも言う、「汎神論は宿命論であるという主張に関してそこで述べられたことは、自由が十分に根源的に経験される、ということつまり、それと同時に自由が概念的に把握さ



れるということでもあるわけですが、そのばあいには、汎神論は自由を排除しないばかりか、かえって汎神論こそが唯一可能な体系として要求されることになる」(SA143)、と。

自由が十分に「根源的」に「経験」されるということは、同時に、自由が「概念的」に「把握」されるということだとハイデガーは言う。逆に言えば、自由が「概念的」に把握されない場合には自由は「根源的」に経験されない、ということになる。

自由を「概念的に」把握することは、自由を「現実的に」把握することとは違う。現実にはわれわれが把握しているのはせいぜい、現実的自由、すなわち現に「認められ」「与えられ」ている自由、一定の制限の上の自由でしかない。初めてわれわれが自由というものを意識するのはわれわれ自身に加えられる過重な束縛の局面にあつてのことであり、したがって初めてわれわれが現実的に「自由を経験」するのもやはりこの束縛からの解放の局面においてである。ここでは自由は束縛に対する拒否、束縛の現実に対する反現実として希求される。したがってそれは自由というより解放と呼ぶにふさわしいものである。なぜなら往々にしてわれわれはわれわれを縛る苦痛にみちた制約が無くなった際にはもはや「自由」を求めることは無いからである。

しかし、本来、概念的には、自由とはこうした「束縛からの解放」を意味するものではない。

ハイデガーは自由についてのわれわれの把握を三つ挙げている。その第一は「一連の出来事を、根拠づけを必要とすることなくみずから開始するという、つまり自発的に起こなうことができるということ」(SA144)、第二は「この病人は熱がないとか、この飲み物は非課税であるとか言うときの、なにかから自由であるということ」(SA144)、そして第三は「なにかへ向けて自由であるということ、つまりなにかに自分自身を拘束すること」(SA144)である。ハイデガーによればこれら三つのわれわれの自由把握のうち、第三の概念に第一のものを組み込んだものが本来的な自由概念であるという<sup>2</sup>。つまり、第二の「なにかから自由であること」=解放としての自由は、本来的自由ではないのだ。

第一の自由とは、いかなることも一切の根拠づけ無しにみずから開始する、ということである。そして第三の自由とは、なにかへ向けて自由であるということ、つまり自分自身を・なにかに・拘束することである。あくまで他からの拘束ではなく自分が・自分自身を・なにかに・拘束するのであるが、自分が自分自身を拘束する「そのもの」は世界が要求する何らかの記号的役割ではなくあくまで「なにか」であり、その「なにか」が「なに」であるのか、自分自身を「なに」に向けるのかは完全に自分自身に委ねられている。「形式〔形相〕的な自由概念は、(こうした)自分の本質規定における自主性としての自立性」(SA145、括弧内引用者)なのであって、この自由、すなわち自分の本質規定を「する」という自立性こそが概念としての自由、ハイデガー＝シェリングの言う自由なのであってみれば、この自立を阻害する要因の単なる除去(すなわち「なにかから自由であること」としての第二の自由概念)は、この本来的自由＝自立を可能にするための条件整備でしかない。第二の自由概念は、現実の中で自立を妨げられている自己を、概念的・形式的に考えられた可能的＝本来的自由のデフォルト空間に置き戻すという消極的な意味合いしか持たないのである。ハイデガーが挙げた第二の自由概念における「熱がないという自由」の例について言うなら、「熱がない」ということは人間が「自由である」ことを実現させる

条件でしかなく、人間が自由であることそのものではない。

これに対し、第一の自由「一連の出来事を、根拠づけを必要とすることなくみずから開始すること、つまり自発的におこなうことができるということ」、第三の自由「なにかへ向けて自由であるということ、つまりなにかに自分自身を拘束すること」は「自由であること」それ自体の概念である。すなわち、「自由である」ことは、解放されることではなく自ら「開始する」ということであり、しかもその際、「根拠づけを必要とすることなく」／つまりいかなる現実世界の具体的根拠も正当性も必要とすることなく／言い換えれば現実世界の根拠や正当性なしに、自ら開始「する」ということなのである。

まさにこの点においてシェリングは汎神論を求めるのだ。

神の奴隷である前に既にわれわれは現実世界の奴隷だからである。

この世界の「外」ではなくこの世界の「中」で、秩序と規則に満ちたこの日常世界の中において、一切の根拠づけ無しにみずから開始することなどはわれわれにはありえないことのように思える。自由であること、すなわち現実世界の根拠や正当性から離れて自ら「開始する」ことは恐ろしいこと、不可能なことである。この世界にしか自分の居場所はない。そしてこの居場所はわれわれが世界の秩序に従う限りにおいて、世界が与える役割を引き受ける限りにおいて、すなわち「世界の一員である」限りにおいて確保されるのだ。現実世界の秩序に従わないというあり方が世界において「悪」であることは自明である。世界の一員であるというあり方を捨て、われわれが人間であるということは、この世界の中においてわれわれが「悪」であるということである。われわれが自由「である」ということ、すなわち人間「である」ということは必然的にわれわれが「悪である」ことを出来させるのである。

われわれに可能なのは二つの選択肢である。ひとつはわれわれが世界の一員であるということ。そしてもうひとつは人間であるということである。この二つの「である」の前にわれわれは置かれている。だが既にわれわれは世界の奴隷である。われわれは世界の中に生まれ落ち、世界の一員として世界に従い、この世界の中で生きてきたのだ。この奴隷であるわれわれの目の前にあるのは、このまま世界の「中」にいるのか、それとも「別の」あり方を選択し、その当然の結果として「悪である」というおそろしいあり方／世界の一員ではないおそろしいあり方を受け取るのか、という選択である。

人間でありかつ自由であるために、われわれは「悪」であるというあり方に自らを引き渡さなければならない。

それはわれわれ自身の意志ではない。われわれは「悪を」意志するのではない。「悪」に行き安全な自分の居場所を捨てるようなことをわれわれ自身が望んでいるのではない。それにもかかわらずわれわれはそれを望むのだ。われわれは自己の維持を欲し、自分の居場所を欲し、居場所を確保するために「悪」を避けてきた。だがそれにもかかわらず同時に自由を欲するのだ。それはわれわれが奴隷だからである。

世界の中で奴隷であるわれわれを神が作ったのだ。われわれを世界の奴隷とし、奴隷としての苦しみの中に置き、必然的にこの選択の前に引き据えたのは神である。まさにその苦しみの中でわれわれが奴隷であることをやめ、この安全な縛る世界を出て行こうとし、

人間でありすなわち自由であろうとするのは、すなわち「悪」に自己を引き渡そうとするのは神の意志である。われわれを作った神の意志こそがこのわれわれの越境の苦しみにおいて実現しているのだ。

「してみれば、なんと愛（神）こそが悪の原因だということになる！」（SA262）<sup>3</sup>。

まさにこの点にシェリングとカントの分岐点をハイデガーは見る。カントにおける人間の自由とはあくまで善を意志するものだからである。

ハイデガーによれば、カントの哲学はたしかに「非本来的な自由概念から本来的な自由概念への移行期をつくり出し、形成している」。「自由はカントのもとでもまだ感性に対する支配とされていますが、しかしこうした支配にとどまるわけではなく、この支配にしてもすでに、自分の根拠における自立性と、自己立法という意味での自己規定と解されています」。しかし「それにもかかわらず、このカントの自由概念においては、人間的自由の形式〔形相〕的な本質の画定はまだ完成されてはいません。というのも、カントはこうした自由を自律として、もっぱら人間の純粋理性だけに置き入れているからです。この純粋理性は、感性に対して、つまり理性とはまったく別のものである「自然」に対して区別されたままでは、結局のところこれから切り離されたままでもいるのです。人間の自己は、いまだに「我思う」の自我性からのみ規定されており、この自我性は、人間の動物性としての感性に積みあげられているだけで、自然のうちに真に組みこまれてはいませんでした。自然、あるいはこう呼ばれているものは、ここでは依然として否定的なもの、ただただ克服されるべきものにとどまっており、人間のまったき現存在を共に規定する固有の根拠になってはいません。だが、自然がこんなふうには捉えられるならば、つまりただただ克服されるべきものとしてではなく、共に規定しているものとして捉えられるならば、自然は自由とのあるいっそう高次の統一に入りこむことになります。しかし、逆に自由のほうも、たとえ展開されていない自由としてであるにしても、自然に組みこまれることになります。自由のこうした完全な普遍の本質概念に達する一步を、フィヒテを越えていくなかではじめて踏み出したのが、シェリングだったのです」（以上、SA145-146）。

カントのいう自由はまだ本来の自由ではない。ハイデガーはそう言う。外なる自然を支配し、自己の内なる自然である感性をコントロールしようとする「自我」は、こうした二つの自然と対立することによって自らの存在の領域を狭めている。たとえ「こうした支配にとどまるわけではなく……自分の根拠における自立性と、自己立法という意味での自己規定」へとカントが踏み出しているとしても、自分の思うとおりに自分を形成する自由はまだ本来の自由ではない。純粋理性によって画定された自己を自らに与える「自律」、言い換えれば自己の理性によって自己の感性を支配し制限することは、支配され制限された内部をもつ自己を生きることだからである。自由であることは理性によって支配されることではないはずである。まして理性があらかじめ描いた下絵に従って自己の存在を固定することではあるまい。

このカントを越え、初めて本来の自由への一步を踏み出したのがシェリングだとハイデガーは言うのだ。そしてその方法とは、「自然とのいっそう高次の統一」に入り込むことなのだ、と。

自由とは自らにのみ由って存在することである。それは、根拠づけを必要とすることなく自ら開始すること（外的根拠づけに依らず自らのみを根拠として開始すること）であり、さらに世界が要求する何らかの記号的役割ではなく自分が・自分自身を・なにかに・拘束すること（自分の本質規定における自主性としての自立性）であるとされた。

自らに由ってのみ存在することが自由であることだとすれば、自らに由らず存在すること／「他」に因って存在することは自由ではない。カントに至る自由論は、この「他」の排除、すなわち、自己に対して、自己が自らに由ってのみ存在することを妨害する「他」の排除によって自由を確立しようとするものだった。この場合の「他」とは、一般的には社会的権力やわれわれを翻弄する外的自然として捉えられる外的他者だったわけだが、カントはわれわれ自身の内なる感性をもわれわれ自身を強制し支配する内的他者として対象化する。したがってカントにとっての問題は、自己を強制するこの内なる自然を、自己の理性によって統御し支配するということだったのである。

たしかに、自由であるということは自然に支配されることではあるまい。だが、理性によって支配されることでもないはずである。

シェリングはまさにこの点にカントの隘路を見、それを「自然とのいっそう高次の統一」に踏み越むことで突破したのだとハイデガーは言うのである。では、そのシェリングの一步とは何か？

自然をすべて、自己とすることである。

つまり、わたしは自然である。

自然を、「自」を支配する「他」と置く限り、われわれは自然に対立し、自然「からの自由」を求めなければならない。だが、われわれが自分を支配するすべてのものと対立しそれを排除しなければならないのは、支配する「他」なるものがあるからではなく、支配される「自」があるからなのだ。自分を守り、自分を維持し、自分の自由な領域を確保しようとするわれわれの「自我」があるからこそわれわれはまさにその「自」において支配され翻弄されるのである。

わたしは自然である。

わたしが自然であるとすればわたしに「他」なるものはない。わたしは自然のすべてであるからである。

わたしが自然のすべてであるとすれば、わたしは生き物をはぐくむ春、育つ草であり、そしてそれらを枯らす冬、人を呑む恐ろしい津波や台風、あるいはわれわれの身体を滅ぼす病、あるいはわれわれを灼く感性である。人にとって善である春であることがわたしであること・人間であることなのではなく、春であり冬であること、伸びる草木であり人を滅ぼす地震であることがわたしなのである。わたしはこれらのすべてである。自然はこれらすべてだからである。だとすればこれらのすべてを、すなわち善と悪とのすべてをわたしにおいて生じさせること、あらゆる計算と予測を超えて、生じるものを生じるままにすべてわたしに生じさせることが、わたしが自然であり、したがって自由であり、したがってわたしであるということである。わたしが自然であるということは自我を自然へと拡張することではなく、まさにこの自我を、すなわち自他の区別を立て、自他の区別において

自分を維持しようとする自我を「自然との統一」の中に放棄することなのだ。そしてこれらのすべてであるということがわたしは自由であるということだとすれば、自由へとわれわれが越えて・行くのは自然を越えて・行くのではない。自由へとわれわれが越えて・行くのは自らを越えて・行くのである。善を意志し、悪を避け、自然を支配し、すべてのものを分節化し、そうすることによって自己を維持しようとする自分の理性の現在を越えて行くのである。これがわたしは自然であるということである。だとすればわたしは自由であるというのは、わたしが自由であるということが不可能だということである。他に対してこのわたしは自由であるということが不可能だということなのである。

わたしは自然である。わたしはわたしであり全体である。わたしはこのわたしにおいて既に全体なのであり、わたしはこのわたしにおいて既に——本来という意味において既に——自由なのだ。わたしは自然だからである。そしてわたしは自然であり全体でありすべてがわたしであるとすれば／万物がわたしでありわたしが万物であるとすれば、わたしは神なのである。

わたしは、神が現成する身体である。

神がわたしを置いた世界というこのこの根底の中で、わたしはいつでも自他を分け、善悪を分節化し、自己を維持しようと欲している。わたしの生きる瞬間ごとに、いつでもこの「今」、わたしは「わたし」が失われることを恐れ、「わたし」の拡張を求め、「わたし」に苦しんでいる。「わたし」がある限りわたしは「他」との間で「他」によって支配され浸食されることを免れえないのだ。生きている限り永遠に生起し続けるその都度の「今」の根底において、「わたし」という根底において、わたしは「わたし」に苦しむのである。

だが、だからこそこの根底の「今」はいつでも、わたしは自由であることを取り戻す「今」、すなわちわたしが人間に置き戻される場所なのだ。ここ以外にわたしは自由を取り戻す「今」はない。わたしは「今」以外に生きる場所を持たないからである。だとすればわたしのこの「今」は、わたしがわたしに苦しむ「今」であり、同時にこのわたしを捨てわたしから出て行く「今」であり、そして出て行くわたしにおいて神が現成する「今」である。この根底、わたしという根底こそが神が実現する場所、神の出どころなのである<sup>4</sup>。そしてわたしが生きている限り、「今」はわたしに到来するのだ。

わたしにできること、わたしの責任は、このわたしという場所／自然である全体のこの部分としてのこのわたしのありかを自然に開くことだけである。わたしの責任は、これまでわたしがわたしの維持のためにわたしに禁じてきたあらゆることをわたしに解放することである。神の奴隷として、現成する神の身体として、自然である全体のこの場所として、外なる一切の根拠を排し、感性が欲する生命としての自己維持と理性が欲する社会的存在としての自己維持の境界線を越え、あらゆる世界の命令に背き、あらゆるわたしの理性の善を覆し、わたしはわたしにおいて生起するあらゆることを開始する。生まれることを拒否されてきたわたし、「まだ-ない」わたしをわたしは生まれさせ、この世界に立ち現れさせ、この世界でわたしは全面的に、あらゆるわたしを生きるのだ。わたしは自然だからである。それはわたしが生きて行くためではない。それはわたしが自由を／自由がわたしを生きるためである。わたしは自由である。自由がわたしを所有しているのである。自由が存在するために／自由は実現するために／神は現成するために、わたしをその実現の場として所



有するのである。

こうしてわれわれはあらゆる越境、あらゆる生成がそのまま神の現れなのだという驚くべき結論に達する。

それは、神が生成であるのではなく、生成こそが神であるということである。言い換えれば、生成こそが絶対者であるということ、われわれは常に、既にこの根底にあり、したがって同時に生成にあるのだということ、われわれはわれわれの自由へ、すなわちわれわれの死へ向かうのだということである。

われわれにあるのは、自らの安全な壁を切開し *ent-schloßen*、われわれの死である見えない向こう側に、いつでもこの「今」のここにおいて越境するという決断 *Entschlossenheit* である。その歩みが悪であるか善であるかはどうでもよい／すべてが善いことなのだ。

すべてが神において善いことなのだ。生成すること、越境すること、個を安全に閉鎖し維持しようとする欲望から出て行くこと、神にではなく世界に適合し・神においてではなく世界において生き延びようとしてきたわたしの欲望の外に出て行くこと。神がわたしに与えたあらゆるわたしの可能性を恐れながら十全にわたしが生きること、世界ではなく神がわたしに与えたすべての「今」をわたしがわたしのままに全面的に生きることは神において善いことなのだ。それはわたしが神へ帰ることである。

わたしはただ見も知らぬわたしへ、そして神へと手を伸ばして世界から出て行くのである。この世界の中で、秩序に満ちたこの世界の中で、あらゆる世界の暖かい関係から離れ、秩序に背き、居場所を捨てて、ただひとり自らの歴史を歩いて行こうとするとき、こうしてわたしのそのすべての道のりを許し、いやむしろそれこそをまさに人間「である」こととして要求する神なしに、どうしてわたしは歩いて行くことができるだろう？<sup>5</sup>

こうしてハイデガーは言う。

自由であることがそれによって規定されている必然性、いや、もっと適切には、それとして規定されている必然性は、自己の本質の必然性です。しかし、自己の本質の規定、つまり、自由のうちにあってもっとも根源的に自由であるものは、人間存在の始原の本質に由来する、自分自身をつかみとることであるような、自己を越えて手を伸ばすことです。……もし人間が自由であるとすれば、そしてもし善と悪とへの能力としての自由が人間存在の本質をなしているのだとすれば、個々の人間が自由であるのは、人間がみずから始原において自分の本質の必然性へと決断してしまっているばあいだけだということになります。この決断は、時間系列のうちのいつかある時点でくだされるといったものではなく、決断は時間性への決断としてくだされるのです。したがって、時間性が真に現成するところで、つまり、既在と将来とが現在においてぶつかりあい、人間にそのまったき本質がこの人間の本質としてひらめく瞬間に、人間は自分が、自分をこの自分へ規定した当事者として、自分がそれである者でいつもすでにありつづけてきたのでなければならない、ということを経験するのです。(SA268)

わたしはわたしを歩いて行く。その都度の一步が善であるか悪であるか、それは世界の中のことだ。わたしにできることはそれらをわたしの道のりとして経験すること、そしてわたしのあらゆる「今」をわたしの時間へと開くことである。わたしをわたしの時間に、わたしの歴史に拘束することである。わたしがしなければならないことはわたしがその都度のすべての時間においてわたしであることだけである。こうしてハイデガー＝シェリングにとって自由は必然性でありそして必然性は自由である。

そしてハイデガーは——シェリングに——こう言うのである。

彼にとって、人間的自由の事実がもつ事実性はまったく独自のものです。人間とは、眼前に存在している観察対象であって、それをわれわれが日常のささやかな感情でさらに飾りつけるといったものではなく、人間とは、存在の深淵と高みを洞察しつつ、おそろしい神性やすべての被造物の生きる不安、すべての被造的な創造の悲哀、悪のもつ悪意と愛の意志を考慮に入れて経験されるものなのです。

ここでは、神が人間のレベルにまで引きおろされているのではなく、逆に人間が、自分を越えていくように彼を駆り立てているものに即して経験されているのです。つまり、人間が、どんな時代でも「正常な人」が本気でそうならうとはけっして思ったりはしない——そうなることは、正常な人にとっては現存在の乱れをしか意味しないので——あの別の者であると確認される必要があるその必要性から経験されているのです。人間とは、神が自分を啓示するとき、神がその力を借りてのみこの啓示を果たしうのようなそうした者でなければならないあの別の者なのです。(SA284)

神の下で、わたしが自ら禁じてきたことを「開始する」ということにわたしは自らを拘束する。世界内部的なあり方を越え、既存の世界から与えられた既に言語化され所有されている存在様式を越え、世界内部の存在者すべてを越えて、まだ無いなにか、越えて行くわれわれ自身にさえ予想も計算もできない「どこかへ」と、神と共にただ「越えて」・「行く」こと。目標も終着点も持たず、今いる地点をただ越えて「行く」越境の現在に留まること。われわれにできることはその都度の今、この越境を「開始する」こと、すなわち神と共に出発するということである。それがわれわれが自由「である」ということ、そしてわれわれが人間「である」ということなのだ。

ここにおいて神の世界は事物をではなく生きる命を持つことになる。走る命において神は走り続けることができる。生きる命において初めて神は完成する＝実存することができるのである<sup>6</sup>。

わたしは命である。これはわたしの命、そして神の命である。

神は命を司るのである。そしてわれわれが生きることを／わたしが神の中で生きることを命じるのである。

\*本文中の略号は以下の通りである。また略号の後のローマ数字はページ数を表す。

WF : Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, Philosophische Untersuchungen über das

Wesen der menschlichen Freyheit und die damit zusammenhängenden Gegenstände., in F.W.J.Schelling's philosophische Schriften, Landshut 1809.

SA : Martin Heidegger, Schelling: Von Wesen der menschlichen Freiheit. Frankfurt am Main 1988, GA Band 42.

<sup>1</sup> シェリングは「人間的自由の本質とそれに関連する諸対象についての哲学的探究」(1809年)において、人間にとっての自由とは何かを問い、かつその「人間」とはそもそも何かを問っている。この二つの問いは同じ一つの問いである。なぜならシェリングにとって自由は人間においてしか存在しないものであり、そしてその自由の中にあることこそ人間の本質なのだからである。以下、本論の論述はシェリングのこの論文「人間的自由の本質とそれに関連する諸対象についての哲学的探究」に基づいたものである。

<sup>2</sup> 「この最後に述べられた自由概念から、(一)を組みこんだ「本来的な自由概念の理解がえられます」(SA144)。

<sup>3</sup> こうして、世界の命令ではなく神の命令に従うこと、すなわち世界的秩序ではなく神の秩序の中に生きることは、悪を排除しないばかりかむしろ悪を必然的なものとする。ハイデガーは次のようにさへ言う。「絶対的自由に基づく以上、悪は形而上学的な意味で存在しなければならないものなのです」(SA277)。それだけではない。「悪が真に現実化しているところ、つまり倒錯を意欲することのうちでそのつど決断がおこなわれてしまっているところ、まさしくそこには、自由の単なる「一面」が現れ出ているというのではけっしてなく、自由がそのまったき本質において前面に現れ出ているのだということが、事態の本質にふくまれているのです。」(SA264-265)

<sup>4</sup> 加えて以下も参照のこと。「根底は、まったく空虚に受けとれば、単に神の存在の出どころという意味しかなく、しかもこの出どころは——出どころの規定についての見解はこんなふうに行進していくのですが——まさしく神自身なのです。けれども、シェリングはまさしくこのことを思索によって克服しようとします。つまり、神がいかにして自分自身に到来するかということを、言い換えれば、神が——思索された概念としての神ではなく、生のなかの生としての神が——いかにして自分自身に到来するかということを概念にもたらそうとするのです。してみれば、神は生成する神だということになります！ そうなるのは当然です。神が全ての存在者のなかでもっとも存在の度合いの高いものであるとすれば、神の内にはもっとも重大でもっとも広大な生成が存しているにちがひありませんし、しかもこの生成は、神の出どころから神のいきつくところまでにいたる最大限の幅をもっているにちがひありません。しかし、それと同時にこうも言えます。つまり、神のこの出どころは、そのいきつくところと同様に、これまた神の内にのみ、そして神自身としてのみ存在することができる、と。神はこのように存在するのです！」(SA190)

<sup>5</sup> ハイデガーはシェリングの次の文章「全能と対立する人間の自由など考えることはできない以上、人間をその自由もろとも神的な存在者そのもののうちへ救い上げ、人間は神の外ではなく、神の内に存在しているのだと言い、人間の活動そのものが神の生に共に属しているのだと言う以外にどんな打開策があるだろうか」(WF404)を引用し、さらにパラフレーズしてこう言う。「いまや、根源的存在者もわれわれの自由の事実も取りのぞかれることなく、したがってともかくいずれもが存在し、両方が共存しているとすれば、つまり、こうしたわれわれの自由が根源的存在者の無制約性に絶対に対立するものでありえないとすれば、そのばあい、人間が神と「並んで」(practer)、神の「外に」(extra)に存在しているのではなく、つまり人間が神に対立するかたちではなく、神のために存在しているということ、そして人間がこうしたものでありうるのは、人間がなんらかの仕方でも根源的存在者に属しており、つまりはこの根源的存在者の内に存在しているばあいだけだということを認める以外に、

どんな「打開策」が残されているでしょうか」(SA122)、と。

<sup>6</sup> ハイデガーは次のようにも言う。「実存はシェリングにあってはつねに、自分自身のもとに存在しているかぎりでの存在者を意味します。しかし、自分自身のもとに存在することができるのは、自分の外に出て、つねになんらかの仕方では自分の外に存在しているものだけです。自分の外に出て、そうすることによって自分の外に存在することを引き受け、こうして自分のもとに存在しているものであってはじめて、自分の存在の内的な歴史をいわば「修了した」ということになるのであり、したがって「絶対的な」ものなのです。実存しているものとしての神こそが絶対的な神、つまり神自身であるかぎりでの神、簡潔に言えば、神-そのものにほかなりません。」(SA191)

## “Freedom” of Schelling and Heidegger

Sachiko IGARASHI

This paper discusses Schelling's theory of freedom and its interpretation by Heidegger.

According to Schelling, human beings are created by God to suffer from their self-will and to do evil. Human beings move to escape from suffering and evil, because God needs human beings who keep moving. Human beings abandon their individuality as the ego and move toward “unity”. Schelling's freedom is “liberation” from the ego.

According to Heidegger, Schelling bases its theory of freedom on pantheism. God is everything, therefore God is human being. God is free, therefore human beings are free. Beyond the distinction between self and others, and between good and evil, human beings are moving to “unity with nature”.

Therefore, as a place of generation human beings are nature, everything, and free.